

第6章 明治・大正期の西洋人の日本見聞記の中に見られる日本人の労働観・遊び観

著者	リンハルト セップ
雑誌名	日本人の労働と遊び・歴史と現状
巻	16
ページ	83-95
発行年	1998-08-06
その他のタイトル	Chapter 6 Meiji, taishoki no seiyojin no Nihon kenbunki no nakani mirareru Nihonjin no rodokan, asobikan
URL	http://doi.org/10.15055/00005442

第6章 明治・大正期の西洋人の日本見聞記の中に見られる日本人の労働観・遊び観

セップ・リンハルト

一 理論的な考察

歴史的な資料としての旅行記：虚構と真実

ドイツの諺に「旅をする人は物語ができる」(Wenn einer eine Reise tut, dann kann er was erzahlen) というのがある。「物語ができる」ということは確かであるが、その物語の内容がどこまで信じられるか、それを歴史研究の資料として利用できるかどうかはこの20年間に文化人類学者や社会学者の間で随分論じられることになった。ゲーテの有名な自伝の言葉通り「虚構と真実」、つまり Dichtung und Wahrheit、との曖昧な関係が旅行記、見聞記の場合には他の歴史的な資料よりも大きな問題である。

日本研究者の間では、西洋人でいち早く日本の土を踏んだといわれているポルトガル人のフェルナオ・ピント (Fernao Pinto) が虚構のためにあまりにも有名である。16世紀当時の読者にとっても「行き過ぎ」であったかれの物語のために、かれには Mendes、つまり「嘘つき」という別名がつけられた。徳川の鎖国時代、ロシアのカムチャツカ半島の囚虜所からの脱走者であったポーランドのベンヨフスキ (Moritz Benyowsky) もまた立派な虚構を作った日本見聞者の一実例である。

しかしピントにしる、ベンヨフスキにしる、かれらが日本にきた16世紀、または18世紀は、西洋にとっては日本についての情報が非常に乏しい時代であったから、そういうときに、極端に言えば、日本についてなんでも言えたのであろう。が、1858年から日本には外国人の居留地ができた次第で、日本についての情報も爆発的に多くなって、虚構はだんだん真実に席を譲らなければならなかったと推定できる。しかし、私が前に「チョンキナ」という、幕末・明治期に日本を訪れた西洋人の間で流行っていた日本のストリップの踊りについての論文で示したかったように、同じ現象についての報告は人によって大部違う可能性もある⁽¹⁾。そして、前の人の報告によって後の人の報告が左右されることもある。ある人はその前の人が報告の対象になった現象を見て、「なるほど」といって、前の人の報告と大体同じことを報告するが、自分の独創性を強調したいある人は「前の人の報告が間違っている。自分の目で見たことだけが正しい」と思って、前の人と全然違う報告を書いていると考えられる。

私が今日ここで利用したい明治・大正期の西洋人の日本旅行者、あるいは世界旅行者の日本見聞記の分析の場合は、二つの理論的な出発点を頭の中に置かなければならないと思う。一つは文化人類学・社会学のこの頃盛んに行われている近代観光旅行批判である。世界の観光旅行は違う文化圏の人間の相互理解、国際間の協調のためになるという非常に楽観的な従来の立場

に対して、ラジカルな文化人類学者・社会学者は国際観光旅行を大変消極的に判断している。つまり、国際観光客の多くが外国文化を知りたがるから外国旅行をするのではなく、自分の持っている外国のイメージを外国へさがしに出かけるという国際観光非難である。もう少し悪く言えば、大衆観光、マス・ツーリズムの国際観光客は前から自分の頭にあったものだけを見たがっていて、結局自分の偏見を強化するために外国へ旅行するのだ、とも言える。多くの国際観光客が、非常に限られた時間で、非常に限られた空間で非常に限られた数の外国人と接触した上で、この「自分の目で見た」外国とその文化、社会、経済について判断できる「権威」になる。一つの事例だけ挙げると、私が初めて日本に留学のために少し長く滞在したときには、外国旅行好きな私の義母がオーストリアから日本へ短期間だけ遊びに来た。1969年の夏であったが、東京にも浴衣姿の日本女性がよく見られた。写真好きな義母は「アア、ゲイシャ」と呼びながら、道で出会ったこういう女性の写真を取ろうとした。私がいくら説明していても、着物姿、浴衣姿の女性は彼女にとって「ゲイシャ」であった。

2番目の理論的な出発点は民族歴史学 (Ethnohistory, Ethnohistorie) の方法論である。1960年頃生まれた民族歴史学は旅行記を厳密な方法で一つの歴史資料として評価しながら、文字のない民族の歴史を組み立ててみる学問分野である。この場合は旅行者についての色々な情報によってその見聞記の性格とか信頼性、虚構性が調査されている。この学問の代表者は、厳密な方法を当てはめれば旅行記も歴史的な資料になれる、無価値なものではないと主張している。

西洋人の日本文献のデイスクール

しかし、この研究会のためには虚構と真実だけではなく、虚構にしろ、真実にしろ、日本人の労働観・遊び観に対する西洋人の、または日本人の間のデイスクール (言説) そのものが大切である。フーコーによると、言説は世の記述だけではなく、特別な専門言語とそれに関連をもっている思想、そしてその結果による社会的な力をもっている現象である。つまり、19世紀の日本についての文献が西洋人の間で日本についての支配的なイメージを作り出したとでも言えるのである。

19世紀の半ば頃は日本は西洋人にとってこの世界に残った最後のユトピア、最後の理想の国の一つであったので、その頃日本を訪れた西洋人はもちろんまず日本で自分の理想、自分のユトピアを探した。このユトピアは人によって違った内容をもっていたことはいうまでもなからう。当時の日本は西洋人にとってアリスの不思議な国のようなものであったから、外国人の見聞記の中で労働という日常的なものはあまり問題にされてなかったことは当然である。逆に旅行者もある種の遊びをしているから、遊びに対する好奇心が高いと言えるのではなからうか。

見逃してはならないのは、日本は西洋人の目にはペリーが日本を開国させたときまではねむり姫のように眠っていた。この眠っている日本と働き者の日本とのイメージは全然合わないから、一九世紀の後半に日本を訪れた西洋人が主に「遊びの国日本」を見たのは当然なことであると私は思う。

二 シーボルトまでの言説

勤勉な日本人のイメージの登場

開国後、明治時代大正時代、昭和前期のデイスクールは開国前のそれとはどういう関係にあったのかは非常に言いにくいのだが、無関係ではないと思う。マルコ・ポーロからウィルヘルム・フンボルトまで、あるいはシーボルトの優れた総合的な日本図式ができるまでの頃についてはPeter Kapitzaのすばらしい、2000頁にわたる、しかし詳しい索引があるから使い易い、ヨーロッパにおける日本についてのデイスクールのドキュメンテーションがあるので⁽²⁾、まずそこに日本人の勤勉性についてどういうふうに書いてあるかを調べてみた。

はじめて日本人の勤勉性を強調したのはやはり、1712年にラテン語で出版され、そのためヨーロッパの当時の学者の間に国際性をもっていた912頁にもわたるケンペルのAmoenitatesのなかである。この書の中の鎖国肯定論でケンペルはつぎのように論じている：

「そして、この国の人々は大変な忍耐力があって、つらい仕事もたえるのはなれてはいる……だから私はこの民族の由来がもっと無気力な（weichlich）中国人にあると思えない。

（厳しい自然について）この国の欠点が住民にかれらの道徳、特に勤勉性や無欲、を実現させるのはこの自然の恩である。ここではいくら難い岩であっても、いくら高い山の嶺であっても、この豊富な天下の領域で勤勉な農家が汗まみれの労働をしながら、毎年かれらにある貢ぎ（みつぎ）をだせるのである」⁽³⁾。

ドイツの有名な哲学者インマヌエル・カントはケーニヒスベルク大学で1756年から1796年まで定期的に「自然地理学」という講義を講じていた折り、そのなかで日本についてもふれたが、やはりその場合はケンペルによるところが大きい。だからカントも30年間かれの学生に、日本人が「用心深い、正直な、行儀が良い、勤勉な、忍耐力のある」人々であると教えていた⁽⁴⁾。

1747年から1768年までに65冊に分けて出された『世界史』が最初ロンドンで出版されたが、まもなくフランス語やドイツ語にも訳され、ヨーロッパ最大の、非常に影響力を持った世界史になった。この世界史には日本についても140頁にわたって書いてあって、その中でまた日本人の性格、日本人の長所や短所について論じられている。「日本人はみんな非常に忙しくて、勤勉であり、勉強や読書のために長い時間を費やしている」⁽⁵⁾と長所について述べてある。

ゲッティンゲン大学で歴史を教えていたヨハン・クリストフ・ガッターは1761年から1764年までにかけて「世界史手帳」を出したが、そのなかで日本人の長所として上の「世界史」と殆ど変わらない判断をしているが、日本人がよく働きながら、あまりアルコールを飲まない、食事もしれほどとらないから、普通は元気で長生きすると書いている⁽⁶⁾。今年（平成7年）の敬老の日にはいろんな年寄りがいろんなテレビ番組で自分の長生きの原因について聞かれたときにもよく「一生一所懸命に働いたので」と答えたのは面白かった。

1764年にヨハン・サロモン・セムラーがハルレで「東・西インド通商協会の歴史」の中のある注で日本人の性格をこういうふうに描いている。「この国はどこでも農地として利用され

ている。食べ物の豊富な存在がこの民族の勤勉性の証拠である」⁽⁷⁾。

1772年にはドイツのシベリア探検者ヨハン・ゴットリープ・ゲオルギがイルクツクにあった日本語学校をも訪ねて、そこで教えていた日本人五人に日本についてインタビューしたが、この五人のサンプルから日本人の性格の特質としてやはり「頭がいい、正直、勤勉、和の精神に富んだ」人々であると述べた⁽⁸⁾。

「日本と日本人についての哲学的・批判的な諸考察」というフランス人の神父ピエル・クロード・ル・ジェーンの本では著者は日本人を理想の人間としてヨーロッパ人と比較している。「日本人は手を上手に使っていて、勤勉で、能率よく、注意深い民族である。どんな仕事をして、なんでも完全にしがめるのである。かれの手の製品は完全である」⁽⁹⁾。これは20世紀の70、80年代にもよく日本人の製品についていわれた判断である。

1775年長崎オランダ商館医として来日したスウェーデンの植物学者にして医学者カルル・ペター・ツンベルグにとって日本は理想の国であったので、かれが1791年に出版された日本についての報告の中で日本への賛美歌をうたったことは当然である。もちろんかれにとっても日本人は勤勉な、よく働く人々であった⁽¹⁰⁾。

人種差別のイデオログであったクリストッフ・マイナスは1790年にはアジア人について広く論じて、アジア人の中で日本人や中国人が他のアジア人よりよく働くが、それは特に中国人について言えると（彼は）言っている⁽¹¹⁾。

1811年から1813年までに日本に監禁されたロシアの少佐ゴロウニンがかれの「日本幽囚記」のなかに日本人の国民性についての章ももうけている。その中で鎖国政策は日本の隣国にとっては非常に有り難い政策だと論じている。つまり、「数多く、明敏な、よく働く、なんでもできる、外国のものをなんでもよくまねをするこの民族をロシアのツァー・ピョトルのような王様が支配すれば、隣の国はなにが期待できるのか」⁽¹²⁾。

三 開国後の言説

さて、今まで列挙した人々の中で日本を自分の目でみたのはケンペルとツンベルグとゴロウニンの三人だけですが、開港後に日本を訪れて、ある場合には、例えばお雇い外国人として、長く日本に滞在した西洋人は日本人の勤勉性、遊び意欲についてどういうふうに表示していたのであろう。シーボルトまでの言説では日本人は一方的に勤勉な人々として描かれていたのに対して、明治維新以降の西洋日本文献ではいろいろな意見が出ており、それらは簡単に「よく働く日本人」と「気楽な日本人」に分けられると思う。まずは開港前の言説に続いて「よく働く日本人」について述べよう。

「よく働く日本人」

開港後の早い文献として1863年から1864年まで2年間日本に滞在したスイスの外交官であっ

たエイメー・アンベールの本がある。彼は日本人の労働と余暇についてこう言っている：

「中国文明には数日の労働日のあと定期的に休み日があるというありがたい制度に似たものはない。毎月決まって祭日があるが、それらはあまり労働階級のためにはならない。そして、年のはじめに一週間労働は中止になって、都会の人も、田舎の人も、社会的地位、またはもっているお金によって、娯楽に打ち込んでいる。

江戸の町人、職人、工場的手工業者、一般に日本の商業者は西洋人が来るまでは世界中にも非常に珍しい経済条件の下で暮らしていた。かれらは国内需要のためだけに働いていたが、この国は自然の恵みで自分の必要を満足させるほど十分に大きく、十分に開墾されている。数世紀を通じてかれらは気楽な、簡単な生活の楽しみを楽しんでいた。今はもうそうではない。私はこの天真爛漫の時代の最後の日々を見た。どこまでも運のいい大商人を別にしてだれも暮らせる以外の目的で働いてはいなかったが、そしてだれも自分の存在を楽しむ以外の目的で暮らしてはいなかったのである。労働そのものももっとも純粋な、深い娯楽のカテゴリーに位置していた。職人は自分の労働に対して情熱をもって、そのために尽くした時間、日々、週間を数えなかっただけではなく、いや、かれは自分の作っていたものがかれを満足させるほど完全な状態になるまでは、かれはなかなかしごとを止めようとはしなかった。そのものを売れるかどうかはそれほど気にしなかった。疲れたときに、かれは仕事場をでて、自分の家で、または友人とともにある娯楽の場で短くても長くても好きなように休みをとった。」⁽¹³⁾

このアンベールの日本の職人氣質についての見解は西洋人の近代日本文献の言説の一つの筋になっている。職人のその労働の対象に対する精神は唯一であり、つまり日本の職人は極端な完全主義者なのである。しかし、他面では、この職人たちは好きなときにいくらでも遊んでいて、継続的にいつでも同じペースで仕事をしているのではない。それでもいつでも精いっぱい働かなくても少なくとも開国までは容易に生活ができたアンベールは説明している。そして労働は日本人にとって、つまり職人にとって、一種の楽しみであるとの見解も現在の西洋日本文献までは一つの重要な説になっている。このものに対する精神から生まれた日本の工芸品は西洋で一九世紀の後半でどれほど流行ったかはここで説明する余裕がないが、こういうものは——漆、根付け、錦絵、陶器、青銅器など——おそらく西洋人に日本人がよく働くのではなく、日本人がいい仕事をしているということをおしえたのだろう。日本の工芸人、職人の労働の高い評価は例えばジョン・スタルド (1897)、デライト・スイーツァ (1899)、ジョージ・ヘムリン・フィチ (1913)⁽¹⁴⁾ などにも見つけられる。たとえばスイーツァ女史は「日本人は悪く働くことを知らない」と職人を誉めている⁽¹⁵⁾。書評家を職業としたフィチは日本の職人と工芸人の賛美歌を歌った後は、日本の若い世代はどうなるかという心配を表明している。「若い人は外国の競争相手がもっと早い、そうしてもっとのんきな労働で同じような、またはよりいい効果を得るから、親が完全性をえるためにそれほど時間とか努力をつくしているのは意味がないことであると判断しないわけにはいかない。。かれらも我国で労働組合のリーダー達が大勢の機械工たちがそれを認めたまでは歌った利己的な、のんきな労働のゴスペルの授業に感染するであろう。」⁽¹⁶⁾

アメリカ人のヘンリ・フィンクはかれの著書の“Lotos-time in Japan” (1895) の中では

最後の章に“A superior civilization”「優れた文明」という題をつけた。その中でエズラ・ヴォゲルに80年も先だってアメリカ人は日本人から何を学ぶべきかと論じている。一番重要なのはやはりゆとりのある生活、生活を楽しむ(enjoyment of life)ということである。アメリカ人は生活を楽しむことで世界中どこをみても一番下手な民族であるのに対して、日本人はアメリカ人と違ってドルだけを追いかけけているのではない。ゆとりのある生活をできると日本人はもう働かない。そのかわりにかれらは残りの一生を優雅な余暇、自然を楽しむこと、旅、芸術、文学、親類と友人との交わり、のために使っている。これはアメリカ人の死ぬまでは必死に働く、という姿よりももっと合理的、もっと文明的ではなからうか、とかれは問うている。

日本人の平均給料は1日で20セントしかないが、しかし日本人が世界での一番幸せな民族である。ベコン女史を引用しながら、小さい店を持っている人は休日やかれらがもっている小さい庭を楽しんでいて、同じような状態で我国で働く人と比べて楽しみが多く、厳しい仕事がすくなくと説明している。アメリカでは本を読めば、あるいは演劇を見に行けば、それは犯罪に近い時間の無駄使いになっている。休暇を取る人は、健康の為に、あるいは労働のための新しいエネルギーをえるために必要であるという言い訳をしなければならないことになっている。それにたいして、日本人は朝から芝居を見に行く。しかし日本人の一番大きい特質は、かれらの娯楽にではなく、労働の楽しみにある。ヨーロッパとアメリカでは機械労働が支配的であるから労働には楽しみがなくなった。本の著者と自然科学の発明家と芸術家以外はだれも創造性のある労働の美的な興奮を楽しまなくなった。しかし、日本では一番簡単な台所道具を作っている一番地位の低い職人は、脳と趣味と手を使っているから、労働を楽しんでいる、とフィンクはいつている⁽¹⁷⁾。これはもちろん一つの産業社会批判に過ぎない。だからフィンクは日本の将来の危機として産業社会の到来——具体的に工場の煙突、機械、分業などを挙げている——を指摘している。

フィンクより1年あとに妻のレオノレと一緒にアジアの旅行記を出版したミュンヘン大学の美術の先生エミル・セレンカは、南日本では、もう煤煙が清潔な家のなかへ入っていて、鉄道の路線はもう全国につながっていて、そして時間が人間の生活で重要な要因になりつつであると述べている⁽¹⁸⁾。

日本の古代から昭和30年代までに約2000年間近く日本の労働力の大部分をなした百姓の労働意欲、遊び精神について西洋人の日本文献は開国後は殆ど触れていない。農村の段々畑がどれほど美しいとかか農村の婦人達が夏の暑い日には体の上半分を裸にしていると、農村には牛や羊や馬のような動物がいなくて、こういうふうないつも同じような話がくりかえされている。もちろんお雇い外国人の報告は違うが、ここで分析して見た旅行記や日本案内書、そして日本入門書では百姓の働きぶり、百姓の労働観・余暇観はあまり見あたらない。大抵大都会の横浜、東京、京都、大阪、神戸、長崎、そして観光地の日光と宮下、つまり箱根、を「ニッポン」として見てきた西洋人が主に都市人と会っていて、かれらの行動は画いているが、八割の日本人を無視している。

間接的に農家の厳しい仕事に触れているのはストダルドである。かれが美しい景色を見るために農村を訪れた時には動物がいなくて驚いている。日本の百姓が肉だけではなく、ミル

クやバターも知らないとかれは読者に教えている。ストダルドが通訳者を通じて丁度田圃の労働が終わって、村に帰ってきたある格好いい若い農夫に「何を食べて生きているのか」と聞かせた。答から人間は日本の農家のようなきつい労働をするときにも魚や米や野菜という食事を取れば生きられると知って、驚いたのである。生きられるだけではなく、馬がいなくてもごく大きな木や石も動かせる力も与えている⁽¹⁹⁾。同じように間接的にノックスは百姓に触れている。農家の生活がきつくて、変化がないから数千人の若い人々は村から都会にやってくると彼はいつている。彼は百姓の収入はこのきつい労働に対してどれほど少ないのかも指摘している。土佐のある農家が一年では20ドルよりも少ない収入をもらったと彼に見せた。1年間の収入で60ドルをもらう百姓はいい方であるとノックスは報告している。それにしても百姓の生活も楽しみのない生活ではない。なぜなら、彼も一生で一回は社寺参詣、巡礼、または東京への旅が期待できるからである。また、休日とかお祭とか村の周辺の温泉もある。それ以外に自然を愛している百姓は小さい庭を持ち、冬枯れの日々には盆栽を楽しんでいる、とノックスは説明している⁽²⁰⁾。

1907年には「日本で見たもの」を出版したクライヴ・ホランドは日本人と結婚したらしく、以上挙げた本以外に「私の日本人の妻」や「日本のロマンス」も書いた。かれは日本が大好きで、大変好感をもって日本のあらゆる面を描いている。かれにとって農業労働はまず女性労働である。6月に村の娘達や女達がみんな水田の中に入って、田植えという非常にきつい労働をしているが、しかし大変湿っぽい仕事にもかかわらず、彼女達は幸せそうで、愉快で、すごいスピードで働いている。イギリス人の農村婦人達がこの仕事をしようとするなら殆どだれも引き受けまいであろうと彼は推定している。百姓階層の妻達や娘達が例外的に辛い労働をしている。彼女らは朝から露の降りる夕べまで文句をいわずに、いや、楽しそうに田圃や畑で働いている。他人のために働く場合は彼女らは一日で2ペンスか3ペンスをもらっていて、不思議にこの少ないお金から貯金までできる。彼女らは辛い仕事には反感がなくて、こういう辛い労働の一生がかわいそうであるとは思わない。ホランドは日本の豪農にも馬車がないとか豪農の息子のためにも怠惰な時間がないことを重視してはいるが、かれはおもにかれの言葉を使えばこの“indomitable toilers”という農村婦人の働く精神に深い印象を受けたようである⁽²¹⁾。

日本人一般と特に百姓は非常にきつい労働に堪えている、というのが、マルシャル・ピ・ウィルダーの見解である。その原因はかれらの前近代的労働習俗にあるとかれは説明している。「労働階層は今でも古い習俗や手法に固執している……なんでも一番難しいふうにされているようである。働く人なら、非常によく働いている……田舎では生活がもっとも原始的で、古風な面がまだ見られる。田圃の中で刈り株との摩擦で血塗れになった踝姿で男と女が肩を並べて働いている。そのときにかれらは稲作そのものと同じように古い農機具を使っている」⁽²²⁾。前に引用したフィチも百姓の労働について簡単に述べている。「汽車の窓から田圃の中の農夫とその妻と子供が永遠に見られる。これらの人はアメリカの機械工と同じようなすごいエネルギーで働きはしないが、かれらが一日に働く12時間ないし14時間のような長い労働時間を考慮に入れば、かれらは大した勤勉性や良心を表している」⁽²³⁾。

しかし百姓の生活についてはじめて本格的に調べて、報告したのはロバトサン・スコットで

ある。かれは1915年から4年間以上日本でアメリカの政府のために農村社会学的な調査をして、その間日本の田舎を10000キロも旅行したようである。かれの「国の基」という本は450頁にわたるので、ここでかれの見解を一つ一つ述べる余裕がないけれども、百姓の労働観・遊び観を表すところを少し紹介してみよう。この書物でよく現れてくるのが大正前期の農村改良運動である。改良運動の一つの目的はやはり労働精神をレベル・アップすることにあつたという印象を読者は受ける。例えば沢山の村に若者組が中心になって「早起き会」が組織された。こういう会の会員は夏には朝の4時に、冬には朝の五時に起きて、その後会の役人の家にある参加者名簿にサインして、村の神社へ行って、そこで剣道や相撲の稽古をしている。早起きの理由として、早く起きるのは、労働を早く始める為ではなくて、夜遅くまでおきるといふ悪習慣を破るためである、と述べられている⁽²⁴⁾。農村の暮らしを改良するために、農業博覧会がよくおこなわれた。こういう博覧会の内容の一部として、たとえば成功した非常に勤勉な農家の自伝が展示された。ある絵は、毎晩三錢三厘で縄を作っている15歳の青年と毎晩三錢三厘を菓子屋で使っている青年を比較し、勤勉性と節約性の長所を教えていた⁽²⁵⁾。または、ある愛知県の農村の月別の労働時間の規定などなどであった。労働時間は五月から8月までは12時間半で一番長くて、1月と2月には9時間半で一番少ない。人をもっと勤勉に働かせるために、ある村では勤勉の調査が行われた。それによると、男の人の36%が勤勉で、34%が平均並みで働いて、30%がその他というカテゴリーに入るのであった。女の人の中で勤勉な人はもう少し多く、「その他」の人はもう少し少ないが、男の人とあまり変わりがない⁽²⁶⁾。この調査はどういうふうに行つたのかは知らないが、この結果を一般化すれば、日本の大正時代前期の農家の三分の一強が勤勉で、丁度三分の一が平均並みで、三分の一弱が平均より少なく働いたと読みとることができる。この場合はもちろん平均並みが何を意味しているのかが問題になる。愛媛県のある村では、ロバトサンによると1年では200日のための農業労働があるけれども、残りの165日のための労働がない⁽²⁷⁾。山口県ではそれに対して100日の労働しかなくて、全国 averages は150日であった⁽²⁸⁾。結論として筆者は日本の百姓は疑いなくよく働くと言っているが、長時間労働と精一杯働くことは同じではない。東洋人は西洋人と比べて仕事が終わつたという印象を与えないで、いつまでも何かをしてるが、異なつた労働時間が異なつた結果を出すのかは疑わしい。よく働く事例に対して、ロバトサンは田舎の人々の遊び精神にも触れている。地主の飲酒や芸者遊び、博打うちなどをあげているが、貧乏な小作人もまたよく酒を飲むといっている⁽²⁹⁾。暮らしのゆとりも大切であることの証拠として、かれは「親が死んでもご飯のあとは休め」という諺を挙げている⁽³⁰⁾。この本は日本の農村社会の多様な姿を画いているから、高く評価しなければならない。しかし言説にはどれほど影響があつたのか、私は判断できない。農村のモノグラフとしてそのあとは1930年代の後半にジョン・エンブリの名著「スエ・ムラ」があるが、これは余りにもよく知られているからここでは省略したい。

ここで最後に挙げたいのは、西洋人旅行者のほとんど全員にいつも誉められている少し特殊な、しかし旅行者との関係深い二つの職業である。一つ目は、旅行者が日本の港に入ってきたときにかれらがそこで見た、石炭の積み込みについてである。特にヨーロッパから来た場合、日本に着くまでに彼らが何回も見たとのことのあるはずのこの行動が、日本ではどうしてそれほど

かれらの注意を引いたのであろうか。アイセンシュタインのいうには：「(下関から門司にあった) 船へ帰ってきたときに、私はしばらく石炭と米の積み込みを観察した。この場合の日本人の辛抱強い労働力と器用さは感嘆すべきである。石炭の積み込みは男の人と数人の女の人からなる列によって、籠を用いて行われている。この石炭はあまりよくなく、煙とともに消えてしまって、煤をたくさん残しているけれども、日本のものすごく安い労働力のおかげで、非常に安い」⁽³¹⁾。1911年のアブラハムの東洋印象記には、石炭の積み込みは全部手労働なのに、その労働のすさまじいスピードのために門司は世界中で一番早い石炭積み込み港である、と述べている⁽³²⁾。フィンチは2年後同じ石炭積み込みを長崎で詳しく描いている。一つの船に積み込むために2000人も働いていたが、その内の四分の三は14歳から18歳までの若い女の人であった。この若い女子労働者の殆ど全員が10時間もこのきつい労働をしたが、中には、朝の七時から夜中まで17時間ぐらい働いた者もいた。その内で彼女らはお屋のときだけ15分ぐらい休んだ、とフィンチは驚いて報告している。ヨーロッパでは同じことはとても考えられないとかれは判断した。そして17時間で4500トンもの石炭を船に積み込めたのは、やはり「原始的な手法での完全な共同労働の結果」である⁽³³⁾。

石炭の積み込み人夫は西洋人がそのとき「クーリー」(中国語の「苦力」から)と呼んだ手作業労働者の典型的な一例であるが、もう一つの「クーリー」の典型的な姿は車屋のそれである。その車屋の描写は明治時代に書かれた日本旅行記にはかならず現れている。なぜなら、このクーリーたちにあたる職業は当時のヨーロッパ・アメリカには存在しなかったので、クーリーたちは大変エキゾチックであった。かれらをもっとエキゾチックにしたのはかれらの裸の、多くの場合入れ墨のデコレーションで一杯の体であった。19世紀の後半は西洋人の男の人もまだ水泳パンツだけで海水浴とかプールへ水泳に行った時代ではなかった。性に関する欲求不満の多いこの時代には、日本は多くの西洋人にとって前に言ったように、一つの最後の理想の国であっただけではなく、日本は西洋人の目を喜ばせた裸の天国でもあった。もちろんアフリカとかアジアの世界の気候的に暑い地帯では日本の状態を上回る裸の国々は沢山あったが、日本の魅力は、日本がこれらの国々と比べて、黒人の種族社会ではなく、西洋人の白い肌によく似ている住民の住む文明国であったという点にあったであろう。しかし明治政府はしばらくして、車屋などの裸体を禁止して、かれらに、政府の感覚からすればもっと文明的な着物として、半纏を着させた。車屋が西洋人にとって大変重要な存在であった理由をもう一つあげるならば、かれらは大抵英語を少ししゃべれて、西洋人の案内人の役割も果たしていたことである。

西洋人の日本文献のなかの車屋は殆ど例外なしに素晴らしい存在である。あまりにも多いので、一カ所に限って引用しよう。「日本の西の海岸で、ある者は私を田舎の道の上がり坂と下り坂を1日に55マイルも引いた。私は数回も止めさせてみたが、かれはルートの終点にかれの家があって、そこで今晚泊まりたいと教えてくれた。この長い距離を走るために、かれは11時間もかかった。ホテルに連れられて、そこで部屋に行って、挨拶をしたら、かれは水を浴びて、新しい着物をきた。その後私の部屋にきて、お辞儀をしてこう言った：「この長い旅でお疲れになったでしょう。もし、私になにかお手伝いできることでもあったら、教えてください。」

われわれはこういう人をときにはリゾートをまわるために一週間契約で雇った。こういうときにかれらは毎日平均して30マイルを走った。こういう長い旅ではかれらは自分を旅客の使用人でも友人でもあると思っている。かれらはいつでもあなたが楽しめること、または興味のあることをさがしている：景色の綺麗なところ、かれらが知っている歴史の逸話、もしあなたが、例えば花に興味があれば、美しい実物の持参など。いつも大変礼儀正しくて、性質がよくて、忍耐力があって、この日本のクーリーに比較できるようなその他の民族の、その他の場所のクーリーなど、存在しないと思われる。家族に雇われた場合は、こういう人は無条件で信頼できたのである。かれらは家族の小さい子供でも、どんな距離でも、どこへでも運んでいたであろうが、かれらの雇い主はとっても安心ができて、かれらが雇い主のためならなんでもするという信頼をもつことができた」⁽³⁴⁾。

「気楽な日本人」

日本の職人たち、日本の百姓、とくに女の人、日本のクーリー、つまり汽船の石炭積み込み人夫と人力車夫、車引きは今までの報告を見ると非常によく働く人たちで、世界のどこを見ても恥ずかしくない、すばらしい労働エートスをもっていたようである。しかし、どうしてオーストリア・ハンガリー帝国の最初の東亜派遣団の科学上のリーダー、カルル・シェルツァは1869年の10月にかれの日記にこういうふうに入記したのであろう：「中国人と比べて、日本人の方は陽気で、遊び好きで、お酒のみで、仕事嫌いのようなのである」⁽³⁵⁾。かれの日記をどう判断するか、であるが、シェルツァはユーモアの全然ない人間であったから、もしかれのこの見解がかれの場合のみに限ってあらわれているのなら、これを全然根拠のない個人的な偏見として判断できることであろう。しかしそうではない。やはり西洋人の日本文献に「よく働く日本人」の裏面として、「気楽な日本人」も描写されているのである。

1882年から1890年まで東京帝国大学で行政法や国家学を教えていたドイツ人カルル・ラトゲン是这样言った：「これまで、規則正しい労働は日本で殆ど知られていない。これが、日本の労働者は仕事が進まないで大した結果が上がらない、という、外国人みんなが一致している判断の原因であろう」⁽³⁶⁾。同じ東京帝国大学で1887年から1893年までに財政学や経済学を教えていたドイツ人ウド・エッケルトもラトゲンと同意見である：「Dolce far nienteは大変疲れる肉体労働、または精神労働と交替し過ぎる。われわれ北の民族が育てられてきた、恒常的、計画的な労働が、ここではごく平均的な人々の間で知られていない」⁽³⁷⁾。また、1890年から1896年までにドイツの宣教師として日本で働いていたカルル・ムンチンガーも同じようなことを言っている：「日本人の興奮しやすい、せっかちな、気を散らしやすい気質は、日本人を気まぐれとか浅薄、したがって信頼できないひとにさせる。われわれはむしろ、静かな、調整された行動や恒常性や継続性を探す。日本人はすぐに仕事に打ち込むが、そのあとすぐ興味がなくなってしまう」⁽³⁸⁾。

ラトゲンはもう少し詳しく述べている。かれはとくに「日本人が非常に勤勉である」という「観光客の判断」に反論する。「日本では徹底的に仕事はされていない。しかし休日もすくなく、

日曜日の休みや国の祭日での休みは庶民の生活とはまだ無関係である。それに対して大きい祭はみんなが楽しむ。そのときは仕事を一週間も休む。その他のときにもかれらが欠勤する心配はしない。毎日の労働時間でもかれらはやりすぎはしない。非常に数多い休憩を引くと9時間以上の実労働時間は少なからう」⁽³⁹⁾。これは日本人が怠惰であるという意味ではない。「日本人の多くは、近代的な経営が支配的になるまで古風な百姓、職人、商人なら伝統的な経済の場でだれでももっていた特質をもっている。この人々はこういう時代にふさわしく勤勉であり、だらだらしていて、時間をまもらない、あまり能率的ではなく、いつもきせるをのんだり、お茶を飲んだり、話をしたりする。金儲けや節約はまだ自己目的ではない。近代的西ヨーロッパ人、いわんやアメリカ人のいつも変わらない労働はまだ知られていない。この人々は機械での一定の精一杯の労働には慣れにくいのである」⁽⁴⁰⁾。しかし「機械労働が普及するにつれて、これも変わるであろう。鉄道がそれまでに知られていなかった几帳面さを生むと同じように、機械が強制的に労働者の注意を引くのである」⁽⁴¹⁾。この1891年の主張はそれほど早くは実施されなかったようである。

1908年にパールツォーは日本人の近代工場への不適性を論じていた：「日本の労働者は、われわれの意見によれば近代の工場を支配すべきこの軍事的規律に服しようとはしない。かれは好きなときに休みをとって、好きなときに出勤して、好きなときに家へ帰るのであるが、こういう行動の結果として叱られたら、かれは退社する」⁽⁴²⁾。1912年に出版されたドイツ人のヘーバーの「日本の産業労働」には次のことが書いてある：

「モンゴル人に単純労働以外にもっと早いスピードを教えるのは無理であろう。かれは平気で1時間でも14時間でも手で紡ぐ。かれは殆ど疲れないが、他面では殆ど全力をあげて働かないし、もちろん労働には楽しみも感じない。労働時間を減らすと、生産も丁度同じだけ減る。労働時間を増やすと、生産もあがる。賃金をあげると、すぐ出勤する日が減る。お腹が空いているとか、宿がないという特別な条件がなければ、働くことはかれの目には無理なことなのであり、いやナンセンスなのである」⁽⁴³⁾。この著者が日本に行ったかどうかはわからない。このドイツ人の自分の労働エトスに基づく優越感はこのようにすごい偏見を生み出したであろうが、言説ではこういう意見も大切である。同じ年にドイツの在日貿易商団体の機関誌であった“Deutsche Japan-Post”にも日本の産業労働者の批判が載っている。「日本ではときには数日間仕事を休みたい、と望む人が多い。日本の労働者は雨のときに働くよりもいい天気に戻るまで待つのが好きである」⁽⁴⁴⁾。

こういう日本人の不十分な労働倫理に対する批判がドイツ人以外にも行われたかどうかは分からないが、いま示したように少なくともドイツの日本言説では第一次大戦までは「気楽な日本人」、「怠惰な日本人」、「近代的産業労働に適していない日本人」もよく現れている。面白いことに、こういう見解は旅行記よりもいわゆる専門書によく見出される。日本と同じように遅れて近代化されたドイツが、こういうふうに世界貿易の将来の競争相手日本をわざと悪者にしてみたという印象を受けても無理はない。もし本当にそうであったら、現代のシュピーゲル誌の日本報道との連続性もすでにそこに見て取れると思う。

注

- (1) 拙著「チョンキナ ― 一九世紀極東における“目の保養”」, 横山俊夫編『視覚の一九世紀』思文閣出版1992年、269-326頁を参照
- (2) Peter Kapitza (編) : Japan in Europa. Texte und Bilddokumente zur europaischen Japankenntnis von Marco Polo bis Wilhelm von Humboldt. 全3巻. Muenchen : Iudicium 1990
- (3) 上同書、巻2、98頁
- (4) 上同書、巻2、507頁
- (5) 上同書、巻2、537頁
- (6) 上同書、巻2、544頁
- (7) 上同書、巻2、557頁
- (8) 上同書、巻2、630頁
- (9) 上同書、巻2、695頁
- (10) 上同書、巻2、741頁
- (11) 上同書、巻2、784頁
- (12) 上同書、巻2、974頁
- (13) Aime Humbert : Japan and the Japanese illustrated. New York : Appleton, 1874, 267-268頁
- (14) John L. Stoddard's lectures. Vol. 3, Boston : Balch Brothers, Chicago : Shuman, 1902 ; Delight Sweetser : One way round the world. Kansas City : Bowen-Merrill, 1899 ; George Hamlin Fitch : The critic in the Orient. San Francisco : Elder, 1913
- (15) Sweetser, 54
- (16) Fitch, 47-48
- (17) Henry T. Finck : Lotos-time in Japan. New York : Charles Scribner's Sons, 1895, 329-333
- (18) EmilとEleonore Selenka : Sonnige Welten. Ostasiatische Reiseskizzen. Borneo-Java -Sumatra-Vorderindien - Ceylon - Japan. Wiesbaden : Kreidel, 1896, 303
- (19) Stoddard, 125-126
- (20) George William Knox : The spirit of the Orient. New York : Crowell 1906, 232-237
- (21) Clive Holland : Things seen in Japan. New York : Dutton, 1907, 160-170
- (22) Marshal P. Wilder:Smiling round the world. New York, London:Funk&Wagnalls 1908, 116-117
- (23) Fitch, 7
- (24) J. W. Robertson Scott : The foundation of Japan. Notes made during journeys of 6.000 miles in the rural districts as a basis for a sounder knowledge of the Japanese people. London : Murray 1922
- (25) Scott, 60-62
- (26) Scott, 376-377
- (27) Scott, 232
- (28) Scott, 237
- (29) Scott, 213-214, 282
- (30) Scott, 315
- (31) Richard Freiherr von und zu Eisenstein:Reise ueber Indien und China nach Japan. Tagebuch mit Eroerterungen, um zu ueberseeischen Reisen und Unternehmungen anzuregen. Wien : Gerold, 1899, 121
- (32) J. Johnston Abraham:The surgeon's log being impressions of the Far East. London : Chapman & Hall 1911, 151-152

- (33) Fitch, 31-32
- (34) George William Knox: Imperial Japan. The country&its people. London: Newnes 1905, 204-206
- (35) Peter Pantzer : Das Japan-Tagebuch von Karl Ritter von Scherzer. Habil. Diss, Univ. Wien, 1985, 197
- (36) Karl Rathgen : Japans Volkswirtschaft und Staatshaushalt. Leipzig : Duncker & Humblot 1891, 422
- (37) Adolf Freitag : Die Japaner im Urteil der Meiji-Deutschen. Mitteilungen der deutschen Gesellschaft fuer Natur- und Voelkerkunde Ostasiens 31C. Tokyo : OAG, 83-85
- (38) Freitag, 83-85
- (39) Rathgen 1891, 422
- (40) Karl Rathgen : Die Japaner und ihr Wirtschaftsleben. Leipzig : Teubner, 1905, 16
- (41) Rathgen 1891, 422
- (42) Hans Paalzow : Das Kaiserreich Japan. Berlin : Paetel, 1908, 86
- (43) A. E. Heber : Japanische Industriearbeit. Jena : Fischer, 1912, 178
- (44) Ernst Schultze : "Die Konkurrenzfaehigkeit der japanischen Industrie" , Deutsche Japan-Post 11/2 (1913) , 33